



農業の現場力

3月の休日に、当地で勤務する数人で郊外に足を延ばしました。目的は、大自然の中のサウナです。そして、その帰路、様々な方のご厚意によって農業の現場を拝見する機会に恵まれたことは大きな収穫でした。

訪問した農場では、イチゴ栽培用のハウスを設営中で、その中に入ってみると想像以上に温かいことにまず驚きました。

そして、もうひとつ目を引いたのがデジタル機材です。農業が直面している担い手不足や指導員不足は、個々の農場経営だけでなく、地域経済や食料安保といった複数の領域にまたがる大きな課題です。こうした中、持続的な農業を実現するため、デジタル技術の導入が進められつつあることをあらためて実感しました。ハウス栽培において、デジタル化対応は、①圃場の環境制御と、②人材の確保・育成を中心とした効果を発揮しているようです。

前者の環境制御は、温度や光、湿度といった様々な条件で変化するハウス内の環境について、生育に最適な状況を作り出そうというものです。例えば、センサーやそれと組み合わせたハウスの自動開閉機能がその役割を果たします。このほか、ハウス内の状況を常時モニタリングできる機能もあります。例えば、気温が一定のレンジを超えて上昇・下降した場合に、スマートフォンにアラートが送信される仕組みです。これであれば、夜間でも、自宅にいなから監視ができるそうです。これらにより、労働時間の削減や作業負担の軽減といった大きなメリットが見込まれます。

また、こうした省力化だけではありません。デジタル化による生産管理技術の向上を通じて、作物の品質改善や収量拡大、そして安定供給といった点でも効果が期待できます。農業では、植物の個体差に加え、自然環境が相手という難しさがありますが、こうしたデジタル技術の活用や、それに伴うデータの蓄積・分析が進んでいけば、「成功パターン」の再現性は高まりそうです。

次に、後者の人材をめぐる点では、まず、マッティングアプリを活用した人手確保が挙げられます。農業特化型のアプリを使えば、苗を植える、収穫するといった各場面で必要となるスポット人材を無理なく確保できる

とのことでした。働き手の側でも、就農のハードルは高いが、「体験感覚でやってみたい」「日数限定で副業としてやってみたい」という潜在ニーズは思いのほかありそうです(実際、当地の転勤族の方からも聞かれます)。また、人材育成の面では、農業指導員の不足が指摘される中、情報通信技術を使った遠隔地からの指導やアドバイザーは、不安を抱く新規就農者にとって今後ますます重要になりそうです。

一方、課題もあります。デジタル化を進めたい農場主であっても、初期投資の負担感のほか、デジタル技術に関する情報・ノウハウの不足もあり、取組状況には大きなばらつきがあると思われるかもしれません。また、収集されたデータは、将来の付加価値の源泉となる大切な「原石」ですが、その価値を引き出すためには十分な分析も必要です。これを誰が行うのか、そしてその際、データの所有者は誰なのかなど、あらかじめ考えておくことも重要でしょう。

こうした課題に対し、農業関係者だけでなく、IT関連企業、行政、さらには地域金融機関など、様々な主体が連携できる仕組みづくりや、そ

のものとでの実証実験、得られた知見の横展開といったことが、農業の持続性や発展の観点からますます重要になっていくように思われます。デジタル分野という道央エリアに偏りがちな印象もありますが、当地主力産業の1つである農業とデジタルが重なる分野を掘り下げることは、それを起

点とした地域活性化の観点からも意義があるように思います。

【足立祐二(あだちゆういち) 一九七三年、大分県出身。九州大学経済学部卒。金融市場局企画役、国際局企画役、ドイツ・フランクフルト事務所長、調査統計局地域経済調査課長を経て、二〇二三年、旭川事務所長に就任。



【足立祐二(あだちゆういち) 一九七三年、大分県出身。九州大学経済学部卒。金融市場局企画役、国際局企画役、ドイツ・フランクフルト事務所長、調査統計局地域経済調査課長を経て、二〇二三年、旭川事務所長に就任。